アジアと日本の竹製品デザインソース調査研究

小谷公人・阿部　優・久津輪勝男
別府産業工芸試験所

Research of Design Resource for Bamboo Products in Asia and Japan

Kimito KOTANI・Masaru ABE・Katsuo KUTUWA
Beppu Industrial Art Research Division

要 旨

第13回国民文化祭・おおいた98「アジア竹文化の祭典－アジアと日本の竹文化企画展－」の展示会の企画・収集・展示を担当し，アジア10地域及び国内15産地から収集された約800点の貴重な竹製品・竹材をデザインソースとして捉え，今後，幅広く活用する目的で，基本的な製品データベースとその文化的背景の調査研究を行った．アジア各地域においては，収集者の記録を元に画像と文章による製品デザインとともに素材・民俗・文化・技術等について基礎データを収集した．国内各産地については，産地の歴史的経緯や技術の特徴及び製品の用途や製作者などを含めたマクロデータを編集した．これら調査収集した竹製品のデザインソースを『竹編組技術資料－アジアと日本の竹文化資料編－』として編集発刊した．

1 緒 言

全世界の竹林面積の80％がアジア地域に集中すると言われるように，竹はアジア地域に共通する資源であり，素材であり，道具であって，その特徴的な文化とくらしを作り上げてきた源流の構成要因のひとつに他ならない．しかし，かつての我が国がそうであったように，近年，アジア各地域でも，経済や社会生活のグローバル化の急激な進展とともに，各地域の民族や文化によって歴史的時間の中で培われ使用され続けてきた各地域固有の竹製品が急速に失われつつある．

その一方で，近年，竹は資源循環に優れ廃棄しても環境負荷の少ない素材として，特に竹の自生しない欧米を中心に注目されはじめている．現にティファニーやグッチなどのブランドメーカーが竹製のバックをコレクションとして発表した事例[1)]も報告されている．国内においても，喜多俊之やコシノジュンコなど国際的に活躍するデザイナーが竹編組製品のインテリア照明やファッションアイテムを発表[1)]するなど，アジアのアイデンティティーとしての文化的付加価値を見出そうとする展開が始まっている．これらの具体的な事象から読み取れることは，竹製品はアジアの各地域の独特で多様な造形性をその技法とともに記録伝承している民族や文化に固有のデザイン遺伝子・感性の一つとして再認識されつつあるということではないだろうか．

平成10年10月に開催された第13回「国民文化祭・おおいた98」の催事事業のひとつとして別府市を中心に開催された「アジア竹文化の祭典－アジアと日本の竹文化企画展」の企画・収集・展示・保管を担当した中で，これら収集品の多くが，今後，竹という自然素材の活用をはかる上で貴重なデザインソースであり，技術的な展開の可能性においても近未来的な製品開発に重要な資料となるものと捉えた．

本調査研究は，これまでほとんど整理されていなかったアジア各地域及び国内各産地の竹製品をデザインソースや技術ソースとして幅広く活用する目的で，まず，今回の収集品を中心にして，当所がこれまで調査した全国各地や海外の製品資料や技術情報とともに，基礎的なデータを調査研究することとした．

2 調査内容

2．1　対象地域

アジア地域における対象地域は，「アジア竹文化の祭典－アジアと日本の竹文化企画展－」において，収集の対象地域となった11地域とした．

国内における対象地域は，当所が平成４～６年度の３年間実施した「竹製品情報収集事業」[2) 3) 4)]で収集し整理した竹製品や竹材に関する書籍・専門誌・文献・産地資料・産地調査報告書・記録写真ファイル等や「アジア竹文化の祭典 専門部会」の有識者の意見を参考に26産地とした．

アジアおよび国内の調査対象地域をFig. 1に示す．

2．2　調査対象製品の収集と製品数

今回の「アジア竹文化の祭典－アジアと日本の竹文化企画展－」における収集方針は，①現在も生産され，暮らしの道具として使用できるもの②素材や技法に地域的

Fig. 1　アジアおよび国内の調査対象地域

Table 1　アジアと日本の竹製品デザインソース調査研究の調査概要

	調査対象地域名	調査対象品数		調査研究データ	
		竹製品	竹材	製品データ	竹文化特性データ
アジア地域	中国/韓国/台湾/フィリピン/ベトナム/インドネシア/マレイシア/タイ/ミャンマー/ネパール/スリランカ	310種459点	21種54点	①品名(呼称) ②サイズ ③用途 ④収集地	(収集者による) ①竹文化と生活の現状 ②竹材の特徴 ③加工技術・道具 ④竹製品の特色 ⑤現地の竹製品関連記録写真
国内産地	青森/岩手/宮城/栃木/群馬/新潟/長野/静岡/愛知/福井/滋賀/京都/奈良/和歌山/兵庫/鳥取/岡山/香川/愛媛/高知/福岡/大分/熊本/宮崎/鹿児島/沖縄/	249種298点 (内訳) 収集品 177種224点 展示借用 21種23点 参考収集済 51種51点	12種134点	①品名(呼称) ②使用竹材 ③サイズ ④用途 ⑤製作者 ⑥収集地・所蔵	(文献及び産地提供資料による) ①竹製品産地の地域所在地 ②産地形成の歴史的経緯 ③材料種と材の特徴 ④加工技術・道具の特徴 ⑤地域的な風習や文化に関する竹製品の用途 ⑥製品資料・製品写真・産地資料・技術文献資料
計	アジア11地域・国内26地域	559種857点	36種188点	-	-

な特徴があるもの③特殊な用途に対しての工夫があるもの④歴史や文化的な経緯の中で独特なものという以上4項目の条件に該当することとした．

アジア地域の収集には，各々の地域の竹製品に見識があり，「アジア竹文化の祭典 専門部会」が依頼した方々によって進められ，竹製品310種459点，竹材21種54点を収集した．

国内の各産地の収集は，文献資料調査で特徴的な竹製品を選定し，竹製品の収集協力依頼とともに，その地域の公設研究機関や自治体担当課及び産地組合や取引関係者・生産者などを通じて，竹製品177種224点，竹材12種134点を収集した．また，収集した製品以外には展示のために借用した21種23点と過去に当所が「竹製品情報収集事業」等で参考品として収集していた51種51点も含めて調査対象製品とした．

2．3　調査項目

調査項目は，個々の製品データとその地域のもつ竹文化特性データとした．アジア地域においては，個々の収集担当者に調査を依頼し，提出されたレポートをまとめることとした．国内産地のものにおいては，製品自体や文献資料によって調査可能であった基本的なデータとして以下の項目を調査した．

製品データ＝①品名(呼称)②使用竹材③サイズ④用途⑤製作者⑥収集地・所蔵

竹文化特性データ＝①竹製品産地の地域所在地②産地形成の歴史的経緯③製品製作上の竹等の材料種や特殊用具④地域的な風習や文化に関する竹製品の用途・形状⑤製品資料・製品写真・地域紹介資料・技術文献資料

調査内容の概略をTable 1に示す.

3 調査結果と考察

3.1 形態的特徴の相違

農具としての穀物の選別に用いる箕(み)や運搬具としての籠は，共通する竹製品の用途として各地域で，現在でも使用されている．これらを比較すれば，地域的な特徴を知ることができると考えた．

箕は，編組技法的には網代編みでアジアのほとんどの地域で共通するが，その形態は，東アジア地域と東南アジア地域では異なっていることがわかる．つまり，東アジア地域(中国・日本・韓国など)は，チリトリ形(Fig.2)を基本とするのに対し，フィリピン・インドネシア及びネパールでは周囲を竹縁で囲む円形の円箕(まるみ:Fig.3)または円箕が台形(Fig.4)になったものが見られた．円箕に似たものは，国内では沖縄でミジョーキという呼称[5)]で存在していた．

また，運搬具としての籠は，各地域独特なものが多く，網代編みかゴザ目編みを用いているが，そのデザイン形態は運び方や運ぶものが異なることで各地に独特のものがある．特に，その特徴的なものは， 額に紐をかけて運ぶミャンマーのバックやネパールのドコーと呼ばれる背負い籠，インドネシアの胸に布を巻きつけて背負うジャパラの竹籠，中国四川省の乳幼児を背負う籠(Fig.5)などデザインソースとして，技術的にも造形的にも興味深い．

3.2 独特な用途の造形性

アジアにおいては，さまざまな独特の用途の竹製品を確認できた．中国の農家で暖を取るための炭火鉢の携帯籠，韓国の夏に布団の通気性を確保するための竹夫人，フィリピンの食用となるイナゴを入れておく虫籠，タイの川魚を捕る捕獲器仕掛け籠などである．これらの製品を用途別に区分してデータベース化すればさらにその造形性を活用することができるものと考えられる．

衣・食・住・生産・運搬具などのカテゴリーで，特徴的なものを挙げるとすれば，身につける用途のものでは，中国の日除帽子やネパールの雨避け簑(みの:Fig.6)などは，編組技法的にも特徴がある．食文化に関係するものでは，前述のフィリピンのビニビックという豆を貯蔵する籠，タイのおこわを調理しそのまま弁当籠となる蒸

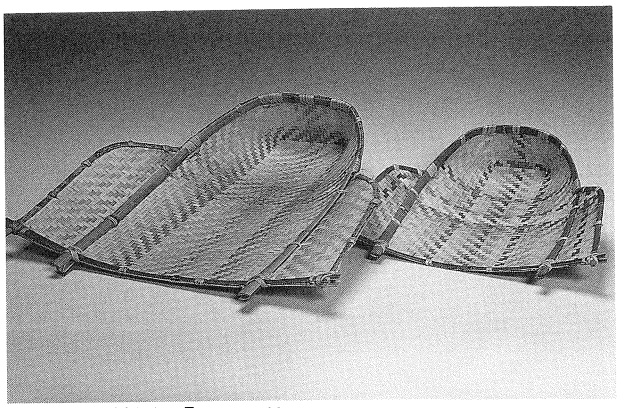

Fig. 2　韓国の「キー」(箕)

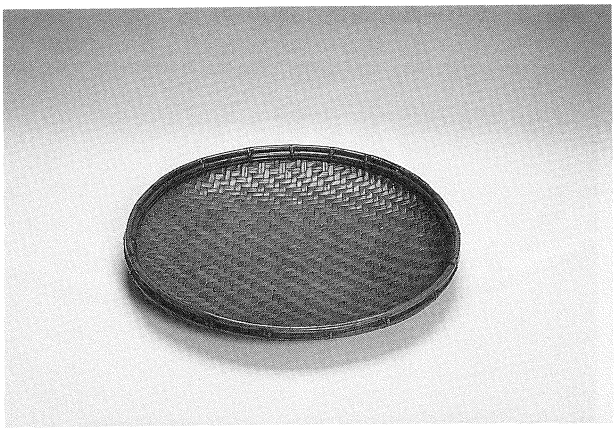

Fig. 3　フィリピンの籾ふるい(円箕)

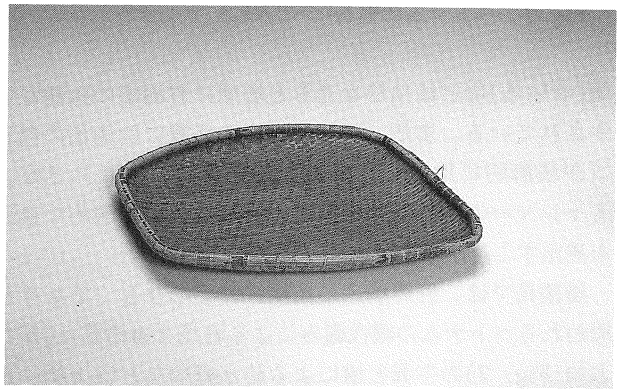

Fig. 4　マレイシアのバディーウィンダー(箕)

Fig. 5　中国四川省の乳幼児用背負籠

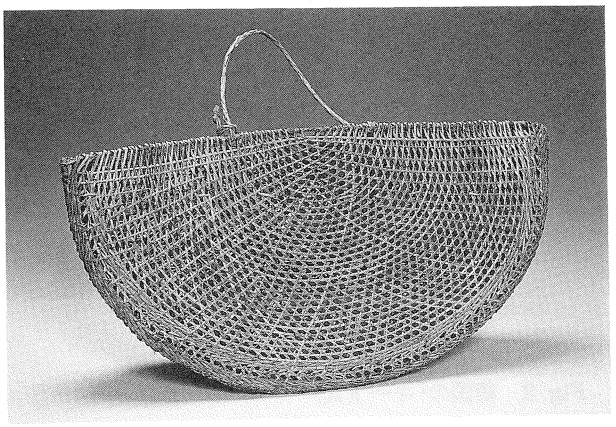

Fig. 6　ネパールの雨避け簑(みの)

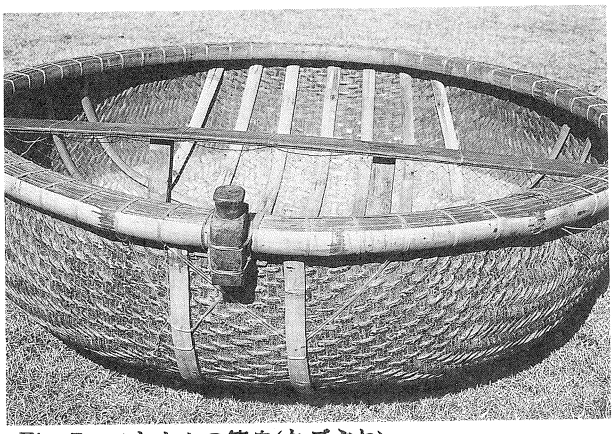

Fig. 7　ベトナムの籃舟(かごぶね)

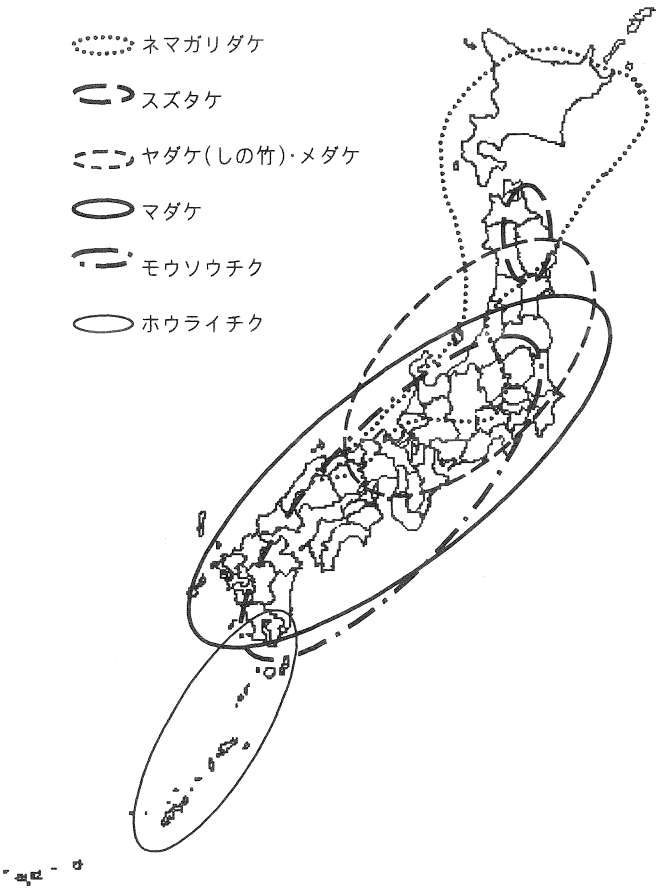

Fig. 8　国内における竹種別の竹製品の分布

篭(せいろ)などは独特な造形と形態に竹編組の機能が生かされている．また，マレイシアの盛籠には染色の色ヒゴが装飾的に用いられており興味深い．生産具では，ミャンマーの腰に下げる鉈籠の編組技法に特徴的な造形を見出すことができる．

運搬具では，世界最大の編組竹製品のひとつであると思われるベトナムの網代編みによる直径２mの籃舟(かごぶね:Fig. 7)の牛糞と漆による防水処理などはスケールアップした造形のあり方を製造技術面で考えさせられる．

つまり今回，これらアジアの竹製品が，形態的にも技法的にも多用で，造形的な展開が可能なものであることを抽象的なイメージではあるが認識することができた．今後は，アジアのこれらの竹製品を使用素材，加工技術，処理技術などの点も含めてさらに検討を加えることで，単なる造形的なイメージソースとしてだけではなく，製品開発上の造形的な生産技術の応用が可能になるものと思われる．

3.3　国内の竹材と竹製品の特徴

竹材種別の竹製品の分布をFig.8に示す．日本は，タケ科植物の北限とされ，緯度によって植生が異なる．九州や西日本では，多くの竹製品が直径6～8cmほどのマダケによって作られるが，東北や東日本の山岳部などでは気候的に寒冷地であるために直径0．7～2cm程度にしかならないスズタケ・ヤダケ(しの竹)・ネマガリダケなどの自生が多い．これら素材となる竹材が変われば，用途が同じ竹製品の編組技法[5]も異なっていた．

つまり，笊(ざる)を例にとると，東北地方ではスズタケやヤダケを材料にした竹製品が主で，新潟の佐渡や長野地方でもネマガリダケを用いるなど，小径の竹材を薄く細くしたヒゴで，籠の底部を網代編みで作る技法が一般的である．これに対し，西日本ではほとんどがマダケを材料とし，底部編み方は菊底編みとなるものが多い．これは，使用竹材の種類･強度等によって，独自な編組技法が発達してきたことを示すもので，自ずと出来上がった竹製品の造形や用途も変化している．これ以外にも，箕や米揚げざる，豆腐籠，果物採取籠，背負籠などで，素材や編組技法の違いなどが全国各地で，地域的に特色のあるさまざまな造形を比較することができる．

また，特徴的な用途に使用されてきた製品として，岩手の麻糸を紡いで入れておく籠＝「苧桶」(おぼけ)や高知の和紙原料の精製作業に用いる「こぶり籠」，熊本の漁業用の海中に沈めて使用する生簀籠＝「二尺五寸胴丸」，茶

摘に使用した「茶摘みてご」，鹿児島の製茶工程で茶葉の乾燥に用いる「ちゃべろ」や吊り下げて塩のにがりを取るのに用いた「塩てご」，沖縄の芭蕉の紡いだ糸を入れる籠＝「布バーラ」や餅を蒸すのに用いる「ムチンブザー」など[6]用途に合わせた編組技法と造形に独特なものがあり，機能を補う各産地独自の造形的な工夫が興味深い．

3.4　国内の竹製品産地の現状

国内においても，竹製品の収集を行うと，既に入手できない製品や生産者自体が存在しない産地などもいくつか見られた．また，現在も竹製品を製造している生産者が全国各地で急激に減少していることも今回の調査から明らかとなった．それらの竹製品生産者の多くは，全国流通ではなく地域内需要に応える生産・流通であったため，需要が減少することと生産者の高齢化，生活不安からくる後継者確保が困難であったことが推察できる．

これは，竹製品の一側面である過疎地域の素材を利用し中山間地域の技能的な独自文化が付加価値となりうる生産技術と固有の竹製品の造形的デザインが失われることを意味している．早急に，デザイン的な造形性の検討とともにこの現状のもつ危機的状況を把握し，技術と造形の文化的な継承をはかる必要が生じていることを強調しておきたい．

4 総 括

4.1 「竹編組技術資料-アジアと日本の竹文化資料編-」の編集及び発行

今回の調査で明らかになったことは，アジアにしか存在しない竹文化の消滅の深刻な状況が，国内のみならずアジア各地域においても急速に進行しているという点である．

そこで，これまでにほとんど整理検討されていなかった竹製品に関するデザインデータベース資料の作成を試み，今回の収集品とこれまで当所が収集してきた各地域の竹文化や竹材・竹製品に関する情報を編集した．編集内容は，「竹編組技術資料-アジアと日本の竹文化資料編-」として発刊(Fig. 9)した．このようなデータベース化は，当所が平成２～３年度に実施した「竹編組技術資料-基礎技術編-/-応用技術編-」[7)8)]の編組技術の資料データベースに続くもので，その成果は国内唯一の竹に関する技術・デザインの総合的な研究機関としての啓蒙的役割とデザインソースとしての人文科学的研究や新たなデザイン展開の方向性を示すものである．

4.2　これからの調査研究の方向

当所では，今回の調査研究を「アジアと日本の竹製品技術・デザイン・資料データベース」構築における基礎的調査研究と位置付けている．竹製品の編組技術や使用形態等を比較分析すると，文化的に共通するものもあり，また一方各地域及び産地の特色も鮮明に見られる．特に国内有力産地では伝統に培われた文化的価値が急激に衰退しつつある現状も見受けられる．今後は，竹製品の機能分類や編組技術分類等の学術的な体系的分析を行うこととしたい．また，将来的にはアジア地域における竹製品情報化や文化的価値創造につなげたい．調査研究においても，アジア各地と共同で研究を進める上では，インターネット等での収集提供手段を効率的に利用して詳細なデータベース化も可能であると考えられる．

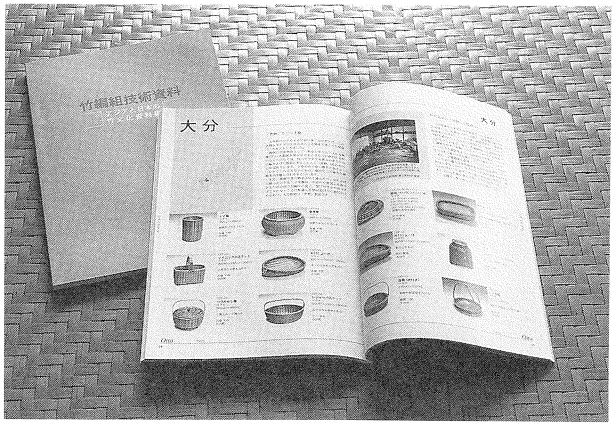

Fig. 9　竹編組技術資料-アジアと日本の竹文化資料編-

参考資料・文献

1) http:/www.wnn.or.jp/wnn-craft/spesial/spjul98/special.html
2) 豊田修身,佐藤幸志郎：大分県別府産業工芸試験所平成４年度研究報告書,(1993),p11-13
3) 豊田修身,佐藤幸志郎：大分県産業科学技術センター平成５年度研究報告書,(1994),p85-86
4) 吉岡誠司,佐藤幸志郎：大分県産業科学技術センター平成６年度研究報告書,(1995),p41-43
5) 工藤員功：暮らしの中の竹とわら,(1982),ぎょうせい
6) 上江洲均：沖縄の民具,(1973),慶友社
7) 大分県別府産業工芸試験所編：竹編組技術資料-基礎技術編-,(1991)
8) 大分県別府産業工芸試験所編：竹編組技術資料-応用技術編-,(1992)